

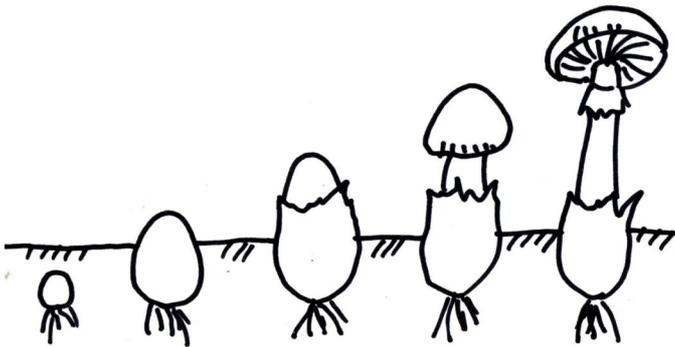
「猛毒キノコの探究 (3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

テングタケ科のキノコの最大の特徴は、根元にある「ツボ」である。テングタケ科の幼菌は、地中でまるでへビの卵のような状態で発生し、ある程度の大きさになると、殻を破って子実体(キノコの本体)が成長してくる。



卵の状態の時は、完全に地面や枯葉に隠れていることが多く、なかなか発見できない。しかし、子実体同士は地下の菌糸で繋がっている。一つキノコを見つけたら、付近の土を少し掘ると、卵が見つかることもある。もし見つけたら、周囲の土ごと掘って植木鉢に生けておくと、成長を観察できて面白い。



シロタマゴテングタケの幼菌やツボから、注意深く土を取り去ると菌糸がついているのがわかる。キノコの菌糸は脆いものが多いが、テングタケ科の菌糸は比較的強靱で弾力もあるので、直接観察するには適している。顕微鏡でも観察できる。



今回は、子実体を丸ごと縦割りにしてみた。これは意外と難しく、慎重にしないと途中で折れてしまう。



キノコの子実体を縦割りにした時に、重要な観察ポイントが2点ある。一つは茎の中が「中実」か、(詰まっている)「中空」(スカスカ)か、という点である。



テングタケ科は「中空」のものが多い。子実体は胞子を作ってそれを拡散させることが仕事なので、中空のほうが少ない物質で菌体を形成できて有利なのである。

もう一つは、傘の裏のヒダと茎の「接触の形態」である。シロタマゴテングタケの場合は「離生～上生」を示す。

これらの特徴は、必ず菌類図鑑にも書かれている。キノコの同定には重要な点なので、よく観察するポイントとなる。